

前期難波宮の南方空間

村元 健一

要旨 孝徳朝難波長柄豊碕宮と考えられる前期難波宮は、調査の進展により、宮内の状況はほぼ明らかとなった。一方、起伏に富んだ上町台地上に築かれたこともあり、周辺域の様子はあまり明らかでない。課題として、京の存在、朱雀大路の有無ということが挙げられるが、いずれの問題も宮城の南方域の実態解明という点に集約される。本稿では7世紀の倭、中国の都城のあり方を検討し、この問題を考察する。結論として、7世紀半ばの段階で難波に長大な朱雀大路をつくる必然性はなく、京城については自然地形による制約から宮城の西南方、上町台地脊梁部に開発が集中し、東南方はあまり開発が進まず、宮城南方は中軸線を挟んで東西不均衡な景観であったことを指摘した。ただし、台地上の区画は自然地形を無視して正方位を意識しており、新たな王都の誕生を予感させるものであった。

1. はじめに

古代の都城は、宮城南門である朱雀門からまっすぐ南に伸びる朱雀大路が都城全体の中軸線となり、左右対称の平面をとるとイメージされることが多い。しかし、これは平城、平安という8世紀以後の事象であり、初の本格的都城とされる藤原京でも長大な朱雀大路の存在は疑問視されている。本稿で扱う前期難波宮は7世紀半ばの倭王宮であり、孝徳朝の難波長柄豊碕宮と考えられている。この宮城は中軸線を正方位にとり、中枢部を左右対称に築き、しかも広大な朝堂院を設けるなど、前代までの倭王宮とは隔絶した規模を有することが明らかとなっており、宮城の平面配置は藤原宮以降の古代宮城の規範となっている。また、この宮城の存在によって倭王権への権力集中を一定程度認め、所謂「大化改新」の具体像が語られるようになってきている¹。調査の進展により宮城内部の様子がかなり明らかになっている一方、その周囲の状況については不明な点が多い。現在では京城の復元は、地名や遺存地割に基づく歴史地理的な手法から脱し、発掘調査に基づくより実証的な段階に移ったとはいえ[積山洋2013a]、全貌を明らかにするにはいたっていない。しかし、その成果を見るだけでも、7世紀半ばにおいて整然としたグリッドプランを有する京の存在を想定するのは困難であり、最大の関心は7世紀末の天武朝においてどの程度京城の整備がなされていたかということになっている。

では、7世紀半ばの難波は「都」としてどのような姿をしていたのであろうか。推古以来、半世紀にわたる王都であった飛鳥に代わる倭王の都として難波はどのように設計され、どの程度その姿を現していたのであろうか。この点を古代において最も景観的な特徴が現れる宮城の南方域に焦点を絞って検討し、7世紀半ばの都である難波の実態に迫ることが本稿の目的である。

第1節 難波宮南方域の様子

前期難波宮は対外的に倭国の威信を示すために築かれたとされる。視覚的には岬の突端の高所に築かれ、遠方からでも非常に目立つようになっている。また宮城内では、内裏南門とその東西両側の八角殿の造営に見られるように、宮城の正面観を南方に強く打ち出したものであったことは明らかである。このように「見られる」ことを強く意識した宮城と言えるが、その周辺の様子はどうかであったのだろうか。

本稿の目的である南方域の様子を見る前に、まず他の地域の状況を確認しておきたい(図1)。内裏東方にある「内裏東方官衙」の東には台地を削り込む谷が入り込んでおり、この谷は前期段階で埋められていない[大阪文化財研究所2012]。したがって現在確認されている東方官衙域のすぐ東側が難波宮東端となる。「東方官衙」から南は、上町台地が南西-北東という方位を取ることもあり、台地の東縁を切り込む谷が何本も入り、やはり整地が行われていない。そのため宮城の東側を南北の直線と考えることはできず、東方官衙域を東端とし、北東から南西に斜行するラインとせざるをえない。それ以东は台地の斜面であり、低地へと連なる。したがって宮城の東方では顕著な開発は認めることはできない。景観としても谷が複雑に入り込んでおり、他の面とは異なる印象がある。

宮城の北方は大坂城域にあたり実態は不明である。宮城と同様に標高の高い場所であったこと、生国魂社がかつてあったとされていることなどから、[積山洋2013b]は園林の存在を想定している。発掘によりその存在が確認されたわけではないが、可能性は高いと思われる。少なくとも生国魂社に関わる杜は存在したのだろう。宮城の北西方向は、難波津の有力な候補地である大川と宮城との関連を考える上で重要な地域である。難波宮からはやや標高を下げながら台地が北西方向に伸びており、谷では一部で整地が認められ、一定の開発が行われていたことが分かる。ただし、現在のところ7世紀半ばの遺構は希薄である[積山2013b]。

宮城の西方では、従来、難波宮の西面大垣と考えられていたSA303延長ライン以西で、塀と倉庫などから構成される建物群が検出された。建物群の南側には龍造寺谷が東西に入り込んでいるため、建物群は北に広がっていたと考えられるが、この地は高所でありかつ平坦面が広がっており、建設に適した場所であるにもかかわらず、後世の削平により古代の遺構の大半は失われており、実態は不明とせざるを得ない。この建物群は倉庫が並ぶことや、正方位の塀で区画されることから、官衙と考えられるが、建物群の位置を宮内とみるか、宮外とみるかは現状では判断が困難である。ここでは、宮外の官衙とみる高橋工氏の説に従いたい[高橋工2014]。

さて、宮城の南方の状況を見ていこう。この地域は、宮城周辺では最も整地層や遺構が検出されている。宮城南門の南には上町谷が東西に走り、この地形は現在でも克服されておらず²、谷は東方に開いて低地へと連なる。同様に、宮城南門の南東方向は上町台地の東斜面にかかり、現在でもかなり地形が下がっているが、発掘の成果では宮城南門の南から東にかけては各所で整地層が確認されており、地形の完全な克服は不可能だったにせよ、宮城に近い範囲に、一定程度の平坦面を確保しようとしていたことは認めることができる。この点は宮城の東方空間の谷の扱いとは大きく異なる点である。しかしながら、平城宮の朱雀門に相当する宮城南門の南側が急な傾斜地となり、儀礼などに使う

には十分な平坦面を確保できないまま谷地形となっていることは、前期難波宮の宮城の正面観を考える上で極めて重要な点である。

一方、宮城南門の西南方は上町台地の高所に当たる。ここでは正方位の柵が確認されており、その中に南北方向の長大な建物がある。これらの遺構については、宮外の官衙と位置付ける高橋工氏の指摘があり[高橋工2014]、おそらくその指摘のとおりであろう。これらの柵が発見されている地域の南方でも7世紀半ばの建物群が見つまっている。いずれも掘立柱であり、また正方位を指向するのが特徴である。同一箇所建て替えが認められる事例もあり、官衙ではなく、居住域と考えられる。こうした景観が広がるのは清水谷までである[高橋工2012]。また、これまでの調査では、建物の検出は台

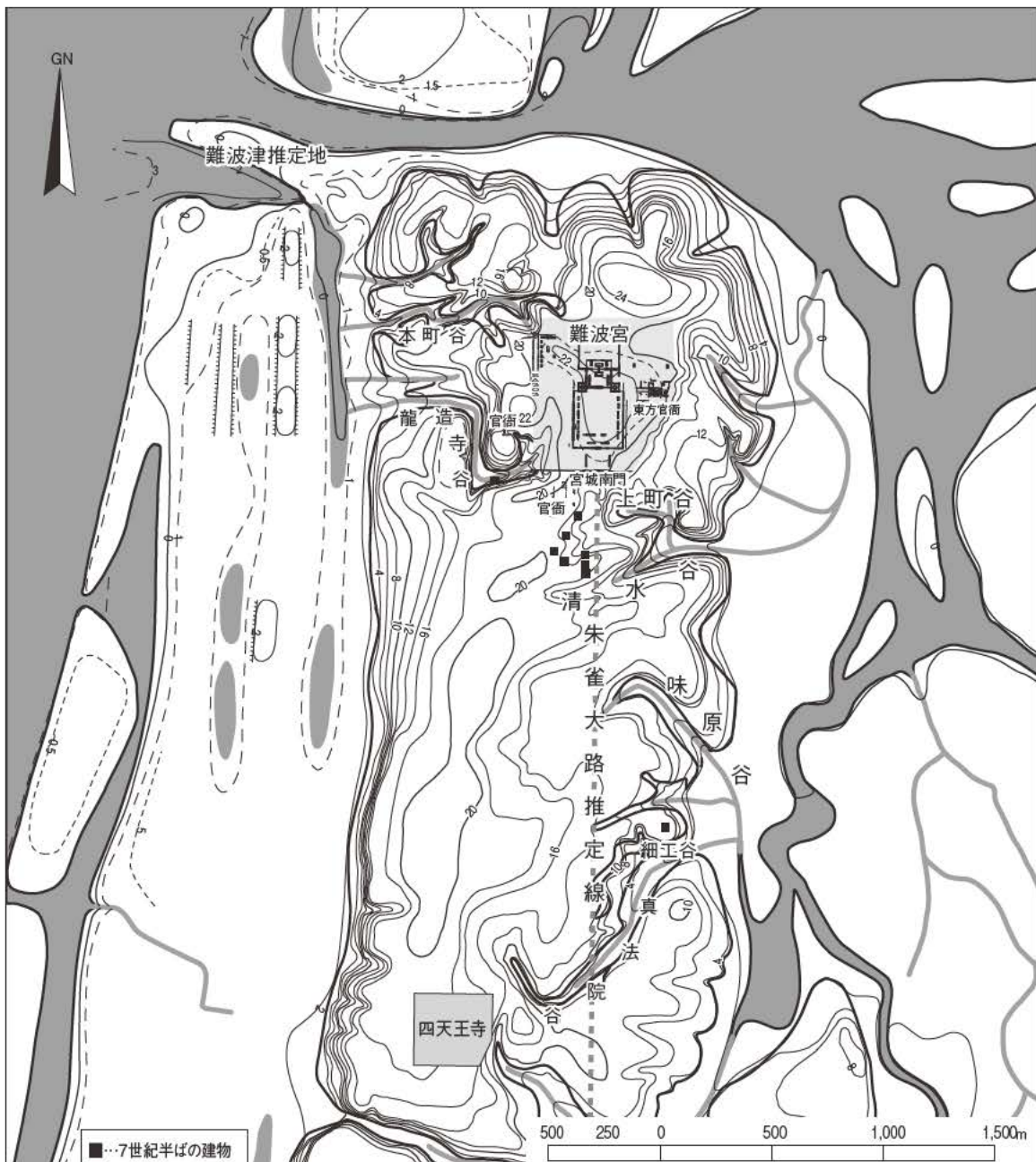


図1 7世紀半ばの難波宮周辺
 ([趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014]
 所掲の「古地理図3 古代」を基に[積山洋2013]を参考にし作成)

地上に集中している。おそらく低地部は整地が必要なため、まずは台地上の開発が優先された結果であろう。なお、細工谷遺跡では7世紀半ばの遺構が検出されており、四天王寺創建瓦と同范の素弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、小規模な瓦葺き建物の存在が想定されている〔岡村勝行1999〕。これも上町台地東側に半島状に突出した場所を占地したと考えられる。つまり、台地の高所を優先的に開発しつつ、その間の連絡を妨げる谷の埋め立てが行われ、平坦面を順次確保していったのであろう。

以上、難波宮の周辺の状況を概観すると、南方域、特に宮城南門から西南方向の上町台地脊梁部の開発が突出していることが明らかとなる。一方で宮城南門の東南方向も、台地の傾斜地にかかるにもかかわらず、一定の整地が行われていたことは、宮城東面の谷が未整地だったこととは明らかに異なっており、宮城正面の開発の在り方を考える上で重要である。ただし、結果として南方域の開発は宮の中軸線の延長線を挟んで東西で不均衡であり、それはそのまま土地の高低と関連しているといえる。

宮城南方域の開発や建物群は、当然、「難波京」との関係で考えるべきものであるが、まずは、宮城と京の接点である宮城南門とその南方について考えてみたい。この点に関して本節で概観した調査成果から述べることは、以下の2点である。

①宮城南門の南面に十分な平坦面が確保されておらず、大規模な儀礼空間とはならない。

②朱雀門に直接繋がる長大な「朱雀大路」の存在を認めることは困難である。

②については第3節で述べることにし、次節では①について考察することにした。この点については以前にも検討したことがあるが〔村元2014〕、比較の対象を同時期の日中の都城としたい。門だけでなく、そこから伸びる朱雀大路の状況も、第3節での検討に備え、予め見ておくことにしたい。

第2節 7、8世紀における朱雀門と朱雀大路

難波宮の宮城南門は、史書でその門名を確認できないが、位置から考えて平城宮の朱雀門の前身にあたるものと見なすことができる。また、中国との比較においても、「宮城南門」と仮称してはいるものの、位置から考えて、唐の太極宮の宮城南門である承天門ではなく、皇城南門の朱雀門に相当するものである。したがって、本節で検討するのは、日中ともに朱雀門、朱雀大街が対象となる。

中国都城の歴史において隋唐長安がかなり特異なものであることはすでに指摘されているが、朱雀大街についてもその指摘は正しく、それまでの都城とは一線を画する。中国都城で南北の軸線の萌芽は後漢雒陽と考える〔村元2010〕。ただし、それは宮城正殿と宮城南門、都城南門が極めて近接しており、後世のように街路としての軸線ではない。これが整備されるのは曹魏の洛陽であり、以後、必ずしも左右対称の中心軸ではないが、歴代の都城に踏襲されることになる。中でも東魏北齊の鄴南城は、曹魏・北魏の洛陽や南朝の建康と異なり、全く新たな土地に築かれた都城であり、比較的制約の少ない施工が可能であった。そのため、都城の正南門である朱明門は都城南面のほぼ中央に位置し、そこから北の宮城に向かって直線的に街路が伸びる（閭闔門大街）。郊祀の際の行幸路だけでなく地勢から考えても周辺の南北交通の幹線路と結ばれていた可能性もあり、唐長安の朱雀大街登場直前の南北幹道として注目される。調査によれば幅は38.5mであり、他の南北道の幅が6～11mであることに比べ、

3倍以上の幅を持つ。朱明門は門道を3本有し、左右に門闕を備えており、都城の門としては特異な形状である³。このように都城の中軸線である閭闔門大街は、都城の軸線として、他の道路よりも明らかに大きな規模を有していたが、後述する唐の長安の朱雀大街ほど突出したものではない。

隋唐長安の朱雀大街の幅は150~155mとおおよそ生活スケールから逸脱した規模であり、郭城の明德門も五門道を持つ巨大な建造物である。京城内の他の南北道路は幅が65m前後のもの、108~134mのものといくつかの段階に分かれるが、いずれも過去の中国の都城の道路に比べ格段に規模が大きい。その中でも朱雀大街の道路幅は最も大きく、まさに未曾有の規模を誇る長安城のメインストリートとして相応しいものとなっている⁴。

以上のような長安の規模や平面プランについては、これまでも何度も触れられてきた。ここでことさらに取り上げるのは、この朱雀大街の利用の実態がいかなるものかということを考えてみたいからである。確かに、規模は大きく、幅150mもの大街が南北5km以上にわたり直線に延びる姿は異様である。しかし、この道が人々の行き来する街道であり、諸国からの使節が入京の際に通った道路だったのであろうか。

結論から述べれば、都市長安の主動線はあくまで東西方向の春明門-金光門大街である。それは渭水が東流し、盆地が南北に狭く東西に開けている関中の自然地形から考えて当然のことであり、その動線は現在でも変わることはない。当然、日本などの東方からの使者が長安に入城する際には、東側の春明門を通ることになる。そのため、彼らが最初に見た光景は、石田幹之助氏が描きだしたように、皇城や東市に挟まれた地域となる〔石田幹之助1967〕。

一方、街道として見た場合、朱雀大街は、南下すると終南山に入り、秦嶺を越え蜀へと至る道である。しかし、安祿山の乱の際に、玄宗が蜀への蒙塵の際に使ったルートは長安から西方に向かってから南行するものである。蜀と長安を結ぶ主な幹線はまさにこのルートであり、それは著名な三国時代の諸葛亮の北伐のころから変わらない⁵。

では朱雀大街はどのように使われたのであろうか。この道路はつくられた最大の目的は園丘・南郊での祭祀（以下、南郊祭祀）のためである。郊祀は皇帝親祭の大祀であり、宮城から南の園丘・南郊まで荘重な鹵簿が組まれ、朱雀大街を移動したのである。これには諸国からの使節も同行し、儀礼に加わることができた。極論すればこの巨大な直線道路は南郊祭祀のためだけに使われたといってもよい。

朱雀大街が南郊祭祀以外に使われた事例は、隋の文帝期にいくつか確認できる。『隋書』卷二四・食貨志には、

〔開皇〕九年、陳平、帝親御朱雀門勞凱旋師、因行慶賞。自門外、夾道列布帛之積、達于南郭、以次頒給。

とあり、朱雀門への皇帝の出御とそこでの軍の慰労と賞賜が行われたことが分かる。ただし、門名については『隋書』卷二・高祖紀下では「廣陽門」としており異なっている。朱雀門は大興城の皇城南門であり、廣陽門は宮城の南門、すなわち唐の太極宮の承天門のことであり、この違いは本稿の目的から考えても無視できるものではない。食貨志の記述を改めて見ると門外に積まれた布帛が南郭に達

したとあるから、門外がすぐ南郭である朱雀門では、この状況に合わず、ここは広陽門とする高祖紀の記述を是とすべきであろう。そうであるならば隋代、さらに唐の初期も含めて、朱雀門が儀礼に使われた事例は確認することができない。遠征軍の慰労という極めて大規模な行事が行われるのも宮城南門だったのである。『隋書』にはもう一か所、朱雀門に関する記事がある。『隋書』卷八十・列女伝・陸讓母の条に隋文帝の仁寿年間のこととして、罪を得た庶子の陸讓を思う母の馮氏の姿に感銘した文帝の行動を以下のように記す。

上於是集京城士庶於朱雀門、遣舍人宣詔曰「馮氏以嫡母之德、足爲世範、慈愛之道、義感人神、特宜矜免、用獎風俗。讓可減死、除名爲民。」

これは朱雀門の前に「士庶」が多く集まり、そこで詔書を読み上げたことを記しているが、先の広陽門の場合と異なり、皇帝が出御せず、舎人が派遣されているだけである。つまり、この史料からも朱雀門が重要な儀礼の場とは言えない。同様に、朱雀大街を用いた儀礼はなく、あくまで南郊祭祀のための道なのである。

以上のように、中国では朱雀門は儀礼には用いられず、朱雀大街も南郊祭祀以外には使用されなかったことを確認した。改めて日本の古代宮都を見ていこう。

日本における朱雀門の初出は孝徳朝の大化5年(649)ことである。『日本書紀』孝徳紀には次のようにある。

三月乙巳朔辛酉、阿倍大臣薨。天皇幸朱雀門舉哀而慟。皇祖母尊、皇太子等、及諸公卿、悉隨哀哭。

阿倍倉梯麻呂のために孝徳が皇極、中大兄、百官とともに出御し、挙哀を行う事例が見られる。「朱雀門」という門名が潤色であるにしろ、このような儀礼が行われたことは認められており、その場所は小郡宮の南門ことと考えられているが、市大樹氏の見解では長柄豊碓宮の可能性が高いという[市大樹2014a]。ただ外戚とはいえ、臣下のために天皇(大王)が挙哀するのは孤例であり[大津透1999]、またその場所が門というのも中国の事例とは大きく異なる。先に指摘したように、前期難波宮の宮城南門は南面に大人数を集めて行う儀礼の場としては不適であり、挙哀が宮城のどこかの南門で行われたことは認めつつ、その場所については不明としておきたい。この後、朱雀門は平城遷都の和銅3年まで見えないが、以後では朱雀門前に儀仗が整列したり(『続日本紀』靈龜元年正月甲申朔)、天皇が門に御して門前での歌垣を見たことなどが確認でき(『続日本紀』天平六年二月癸巳朔)、中国とは異なる独自の使用が認められる。なお、館野和己氏によると、7世紀の倭王宮では藤原宮も含めて朱雀門の門号は成立していない。「朱雀門」に代わって宮城の注目される門として、天武、持統朝では「南門」が頻出し、射礼が行われている⁶。この南門の場所については、天平12年正月の大射を天皇が「大極殿南門」で観ていることから考えれば、「大極殿閣門」に当たると思われる。つまり、7世紀の倭王宮では、「朱雀門」で大きな儀礼は行われていなかったと考えられる。

一方、朱雀路については、7世紀の倭王宮では飛鳥宮はⅢ期の宮域復原を見ても明らかなように、南方には吉野方面に抜ける道があるが、儀礼用の道ではない。またⅢ-B期では、エビノコ郭と宮城南門に挟まれた空間が儀礼空間となる可能性が指摘されているが、それが道路として南方に延びるこ

とはない。飛鳥宮に達する主動線には山田道から飛鳥寺西側を經、宮の東を南下する道と、下ツ道から東方に分岐し、川原寺と橋寺の間を東へと抜け、北流する飛鳥川を渡り、エビノコ郭西面に到達する直線道路がある〔相原嘉之1999〕。

藤原京は宮城南門の前方に南北方向の道路を設けているが、林部均氏が指摘するように平城京のような長大な朱雀大路が設定されなかった可能性が高くなった〔林部2004〕。林部氏はさらに朱雀大路は幅24mであり、他の大路の幅16mに比して確かに広いものの突出した規模ではないとする。また飛鳥川以南では朱雀大路は検出されておらず、羅城門もなく、平城京との違いは大きい。さらに林部氏は藤原宮への進入ルートにも注目し、藤原では南方からのアプローチは取りえず、下ツ道を南下したのち六条、八条大路を通して宮の南面に至ったとする。この指摘は先の飛鳥宮にも当てはめることができ、また難波を考える上でも示唆に富む。

以上のように、7世紀の倭の古代宮都である飛鳥、藤原において、外国からの使節の「京」への南からの進入は想定されていない。日本においてそれが実現するのは8世紀の平城京からである〔井上和人2008〕。また、同時代の唐の長安でも朱雀路は主要な交通路ではなく、ましてや外国使節が入京の際に使用する道路ではなく、あくまで南郊祭祀のための道であった。つまり、中国都城の朱雀路の重要な役割に、南郊祭祀の行幸路というものがあり、隋唐長安の場合はそのために設けられたとも言えるが、南郊祭祀のない日本では、道路としての朱雀路は必要なく、そのために藤原京までの宮都に大規模な朱雀路は存在しなかったのである。平城京になって朱雀路が出現するのは、唐長安の模倣ということもあるが、その用途は南郊祭祀とは関係なく、幹線道路である下ツ道を取り込むことで入京路としての独自の役割を与えた結果である。したがって、平城京における朱雀大路の整備は、唐の長安とは外見上は似ているが、その目的とするところは自ずと異なり、今泉隆雄氏によると、入京者を圧服する舞台装置としての役割を担うことになったのである〔今泉隆雄1993〕。

難波においては、難波津が宮北の大川流域に想定されており〔松尾信裕2014〕、諸国からの使節は北から上陸し、一端、宮の南に回り込むが、相当離れた地点まで南下するとは考えにくく、宮城南門に東西からアプローチしたのであろう。その点で飛鳥、藤原の道路網のイメージに近い。起伏の激しい谷に無理に直線道路を通し、朱雀路をつくる必然性はなかったのである。

第3節 難波京朱雀大路と「難波大道」

前節では7世紀の難波において儀礼、外交使節入京の動線の双方から朱雀路が必要なかったことを述べた。ただし、交通路としての存在と周辺開発の計画線の存在としては別に検討が必要である。

難波京朱雀大路については、四天王寺東方に残る正方位をとる南北道からその存在が想定されていたが、現在に至るまで発掘では明確に確認されていない。しかも細工谷遺跡の調査では、朱雀大路想定ライン上が谷地形であることが分かり、道路の敷設が極めて困難であることが明らかとなっている〔高橋工2007〕。一方で、朱雀大路想定ラインから西側の台地上を中心に、900尺で設定される条坊の想定ラインに合致する発見が相次いでいる。中でも上本町遺跡で見つかった奈良時代の橋の遺構は、この場所に正南北を意識した区割りが存在したことを明確に物語るものである〔大阪文化財研究所

2010]。ただし、そうした遺構の多くは奈良時代のものであり、依然として7世紀の状況は不明瞭とせざるを得ない。

朱雀大路の存在を考える上で、無視できないのが「難波大道」の存在である。朱雀大路が南に延長され、直線的に河内に至ると想定される古代の道路であるが、難波宮の9.5km南方の大和川今池遺跡で幅18mの道路遺構が検出されているのは周知のとおりである[三宮昌弘2009]。その造営年代は必ずしも明らかでないが、出土した土器と、その出土状況から7世紀半ばをさかのぼることはありえず、その敷設は孝徳朝以降ということになる。孝徳朝以前の推古朝においても、難波と飛鳥をつなぐ「大道」が存在したことは確かだが、調査の結果から推古朝の「大道」がこの「難波大道」ではないことは明らかであろう。近年、安村俊史氏が洪河路をその有力な候補としており[安村俊史2012]、その可能性は十分あると考えるが、さらに加えるならば、足利健亮氏が大道とされた丹比邑道という斜行道路もその候補として挙げておきたい[足利健亮1985](図2)。この道路については安村氏のほか阪田育功氏も注目されているように[阪田育功2009]、「難波大道」と路線が近く、難波地域から丹比をつ

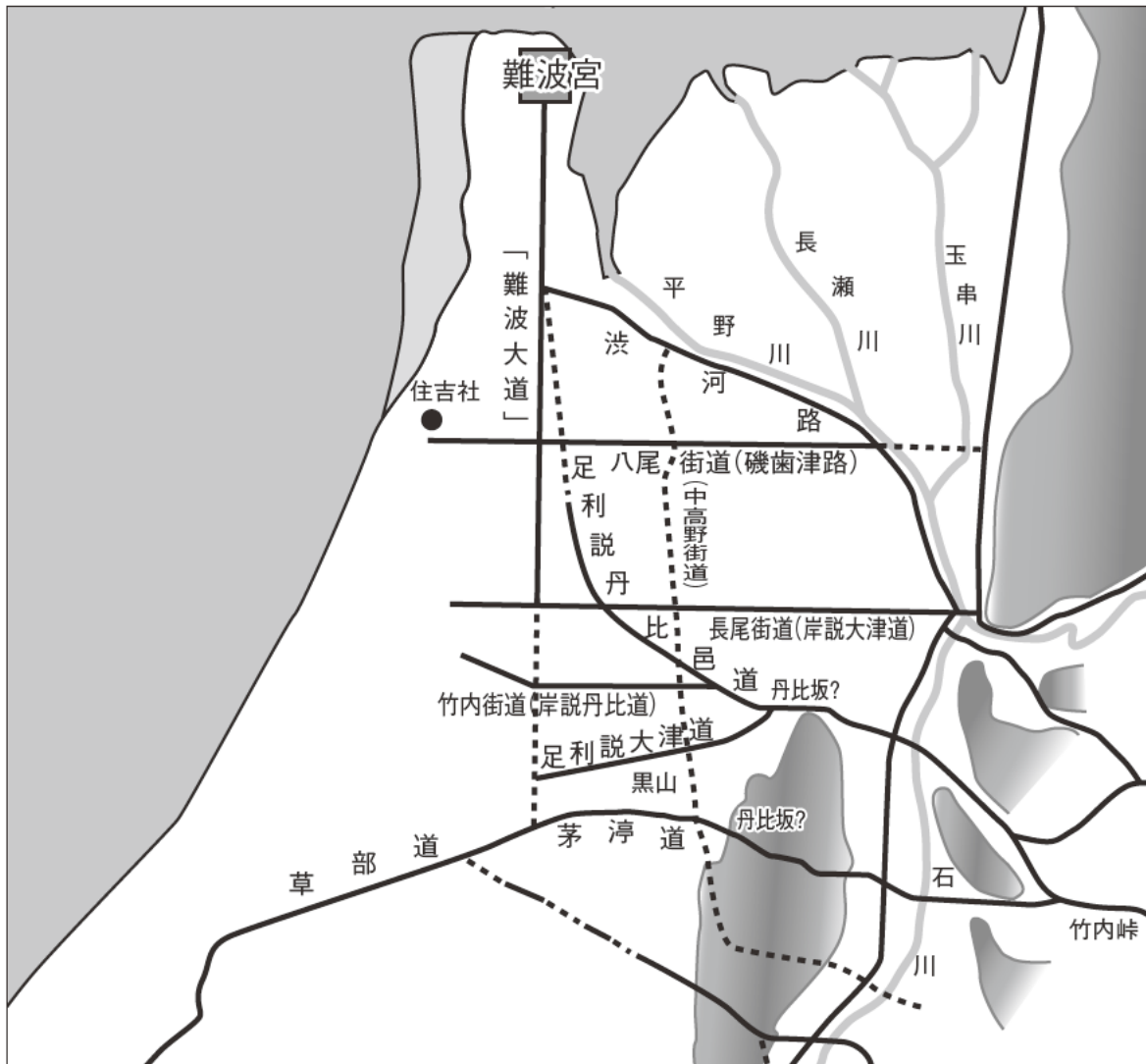


図2 難波周辺の古代の主な道路
([足利健亮1991] 所掲図を基に作成)

なく道路である。筆者がこの道路に注目するのは孝徳期の難波と飛鳥とつなぐ道路を考える上で、大化5年の蘇我石川麻呂の逃走ルートと、その追討軍の行軍ルートを示した史料を重視するからである。この史料は具体的な地名が出ること、謀反を告げられた大臣が飛鳥へ急行したルートであること、難波から飛鳥までの行程が1日以内であること、追討軍の速やかな移動が可能であったこと、以上の諸条件を満たす交通路であり、孝徳朝において難波と飛鳥を連絡する最も整備された道路の一つであり、重要な幹線であったと考えられる。改めて史料を見てみよう。『日本書紀』孝徳紀大化五年条には以下のようにある。

天皇乃將興軍圍大臣宅。大臣乃將二子法師與赤猪、自茅渟道逃向於倭國境。大臣長子興志先是在倭、營造其寺。今忽聞父逃來之事、迎於今來大槻近就前行入寺。…是日、以大伴狛連與蘇我日向臣爲將領衆使追大臣。將軍大伴連等及到黒山。土師連身、采女臣使主麻呂、從山田寺馳來告曰、蘇我大臣既與三男一女俱自經死。由是將軍等從丹比坂歸。

蘇我石川麻呂は「茅渟道」を通り、大和へと逃れている。その追討軍が「黒山」まで進出したところで、石川麻呂の自決を聞き、「丹比坂」から難波に帰ったとある。石川麻呂の逃走ルートと追捕軍のルートが同じだったとすれば、その道路は難波→黒山→飛鳥であり、丹比を通過することになる⁷。この行程について直木孝次郎氏は、「難波大道」がさらに南にのび、竹ノ内街道のさらに南に存在した東西道の「茅渟道」に接続し、飛鳥へと至るルートを想定している⁸。ただし、足利健亮氏が指摘するように、「難波大道」が「茅渟道」まで南に伸びていたかは不明であり、「足利説丹比邑道」の斜行道路と中高野街道の前身道路を経て茅渟道と接続するルートが妥当ではないか[足利1991]。いずれにしろ、7世紀半ばの段階において、飛鳥から難波へのルートは難波の南方から入り込む道路が主要幹線であったことは動かない。では、そうした「大道」が「朱雀路」に連絡し、そのまま北の難波宮の南門に到達したのであろうか。

孝徳の難波遷都の経緯を見ると、当初は小郡や大郡といった既存の施設を王宮として利用している。王権の外港である難波津のある難波には、遷都以前から飛鳥とを結ぶ交通路が存在していた。こうした道路は安村氏が提示した渋河路ルートであったり、足利氏の丹比邑道なのであろう。遷都後もこれらの道は幹線として用いられたと考えられる。一方、前期難波宮は新たに正方位を軸線としているため、宮の軸線と一致する道路をつくるには道路を付け替える必要がある。しかし、難波宮南面は、起伏の激しい地形のため、朱雀路に相当する直線道路の存在を想定することが困難である。孝徳朝において難波宮と直接接続する正方位の幹線道路を築いたとは考えにくく、既存の交通路との連絡を考えればよかつたのではないか。

前期難波宮の造営された7世紀半ばは、ちょうど大和川今池遺跡で見つかった「難波大道」の敷設想定時期と重なる。だが、先に述べたように、大化5年の時点では河内の主要南北道は正方位をとらずに斜行していた可能性があり、正方位に則した道路への付け替えはやや時期が降ると思われる。したがって、孝徳朝か、それ以降に難波宮の中軸線と一致する「難波大道」が設けられたことは事実だが、難波宮の宮城南門からその軸線にそって全て幹線道路とされたかどうかは別問題であり、道路により土地区画の基準線とした箇所もあれば、行政堺として存続したラインもあつたのではないか。仮

に全てが道路だったとしても、平城京に見られるような大規模な直線道路である必要はなかったのではないだろうか。

第4節 難波宮南方の意味

前節までで、7世紀までの倭王宮において朱雀路設置の必然性がないこと、そのため7世紀半ばの難波宮でも朱雀路が存在しなかった可能性を指摘した。そこで朱雀路が道路として存在しない、もしくは主要な幹線として機能しないとして、宮城の南方空間がどのように位置づけられるかを改めて考えておきたい。

難波宮南方の上町台地上のもう一方の核である四天王寺周辺では、近年の調査により、開発は奈良時代以降に顕著となり、四天王寺東方の条坊痕跡とされていた方格地割も中世以後のものであることが明らかとなった〔高橋工2011〕〔市川創2014〕。したがって7世紀半ばにおいて、この地域には条坊のようなグリッドがなかった可能性もある。また、難波宮と四天王寺の間に位地する上本町遺跡でも7世紀後葉の遺構は散見するものの、建物などの遺構が顕著になるのは奈良時代であり、結局のところ7世紀半ばの遺構の分布は清水谷以北という極めて限定された地域となる〔高橋工2012〕。しかも第1節で概観したように、遺構の分布は推定朱雀大路以西の上町台地脊梁部に集中し、推定大路を挟んだ東側は谷が入り込み、整地も十分には行えていない。つまり、東西左右対称に築かれた前期難波宮の中枢部とは異なり、宮の南面域ですら対称性は確保できていないことになる。このことは、前期難波宮は中枢部においてこそ中国宮城の影響を認められるが、その周辺の「京」に相当する部分では、影響はあまり見られなかったことになる。特に宮と京は中国のように統一的に設計がされたものではなかったようである。参考までに、隋唐の都城の造営を見ると、長安では石龍谷を基準線とし〔愛宕元2000〕、洛陽では、邙山から南を望み、伊水が流れ来る伊闕を基準として軸線が設定された⁹。隋唐都城の設計では自然地形を基準に軸線を引き、それが朱雀大街となり、京の軸線ともなるのである〔妹尾達彦2001〕。

7世紀の倭では、京域の設計にあたっては、中国とは異なる独自の方法をとっていた。初の本格的都城といわれる藤原京でも最初に条坊を設定し、その後、宮地が定められたと考えられている¹⁰。つまり、宮と京が統一的に設計されたのではないことになる。

前期難波宮の段階では、藤原京とは異なり、宮城の建設を優先させたと考えられる。ただし、孝徳が難波遷都当初、小郡、大郡などの既存の建物を宮としているように、遷都時点で難波全域を覆う計画性は認めがたく、飛鳥から遷移した支配層もそれぞれに居館を営む必要があった。難波のように複雑な地形の台地上では、当初から広闊な土地を確保することは絶望的であり、整地をしてもなお狭小な地域に集住せざるをえなかった。このため、孝徳は難波遷都にあたり、計画的な京の造営を目指したのではなく、あくまでも台地の上に屹立する宮城の造営を優先し、次いで南方の台地脊梁上での開発を行ったものと考えられるのである。台地の高所に存在する宮外西方の官衙や細工谷の瓦葺き建物は、そうした開発の在り方を示すものなのだろう。ただ、注意したいのは、台地の脊梁上という地形的に制約のある場所にもかかわらず、検出された建物や柵が宮城と同じく正方位を示していることで

ある。これは、条坊制の都城とは形態を異にするが、難波宮周辺に宮城と方位を揃える区画が存在したことを示しているといえるだろう [積山洋2013b]。宮と京城が統一的に計画されたものではなく、また、両者が同時に造営されたものでないにしろ、台地上に正方位をとった宮城の存在が、周辺に影響を与えたことが分かるのである。

おわりに

以上、朱雀大路の有無を中心に、前期難波宮の南方空間のあり方について述べてきた。7世紀の段階で、唐の長安の特徴である広大な朱雀大路の存在は、あくまでも南郊祭祀の際に皇帝が移動する道路として築かれたものであり、それ以外の儀礼空間や、都城内での日常における最重要な幹線道路というわけではない。こうした役割を持つ道路を、7世紀の倭王宮では特に導入する必然性はなかったのである。

一方で、宮城南門前の景観を見ると、台地斜面にあたり標高の低い東側の開発はあまり顕著ではないものの、西側の台地上では、官衙と思われる規則的な建物群、住居と思われる掘立柱建物群が見つかっている。このように宮城前が非対象であることは、例えば外交使節が朱雀路想定線を通った際に違和感を与えたのではないか。このことは朱雀路が存在しないこと、少なくとも平城京のように外国使節の入宮の際の動線ではなかったことの傍証となろう。

以上のように難波宮南面は東西が均等に開発されたのではなく、台地の高所、すなわち宮城西南方に建物が優先的に建てられた景観を有していたのである。難波宮が極めて先進的で計画的な配置を有し、日本古代宮城でまさに画期となるものだったのに比べ、その周辺は居住域が順次拡張されているように、決して整然とした全体プランを有するものとは言えるものではなかった。だが、周辺建物の方位を自然地形を無視して正方位とし、宮城の方位に揃えていることは留意すべき事象であり、これにより宮城と景観的な一体性を生み出したはずである。新たに難波に生まれた「都」は倭の新たな王都の誕生を予感させるものだったのである。

註)

- (1) 難波宮に関する現在までの研究段階は [中尾芳治・栄原永遠男2014] に示されている。また、前期難波宮の調査成果に基づく孝徳朝の評価については、[市大樹2014b] 参照。
- (2) 現状では宮城南門の南側が崖状になっているが、これは現代の改変による [大阪市文化財協会2005]。飛鳥時代の地形は不明とせざるをえないが、斜面になっていたのであろう。
- (3) 難波城朱明門に闕があることから、南城を内城と見なす見解がある [朱岩石2001]。周辺の調査で、外郭に相当する範囲があったことが次第に明らかになりつつあり、朱氏の見解は妥当であろう。そうすると朱明門から北にのびる道は唐長安の朱雀大街には相当しないことになるが、皇帝が南行する際に使う道路であることは同じであり、朱明門外に存在が想定される南北道の道路幅と大きな差はないだろう。
- (4) 以下、隋唐長安については [佐藤武敏1971] [妹尾達彦2001] による。
- (5) 『三国志』 卷四十・蜀書十・魏延伝の裴松之注に引く『魏略』には「夏侯楙爲安西將軍、鎮長安、亮於南鄭與群下計議、延曰「聞夏侯楙少、主婿也、怯而無謀。今假延精兵五千、負糧五千、直從褒中出、循秦嶺而東、當子午而

北、不過十日可到長安。楸聞延奄至、必乘船逃走。長安中惟有御史・京兆太守耳、橫門邸閣與散民之穀足周食也。比東方相合聚、尚二十許日、而公從斜谷來、必足以達。如此、則一舉而咸陽以西可定矣。」亮以爲此縣危、不如安從坦道、可以平取隴右、十全必克而無虞、故不用延計」とあり、漢中から長安へは子午谷を通るのが最短であるが、長安の西の隴右に出るルートが主幹線であったことが分かる。

- (6) [館野和己2000] 参照。天武朝の南門の射礼は『日本書紀』の天武六年正月庚辰、七年正月甲戌、九年正月癸巳、十四年五月庚戌、持統朝のものは十年正月辛酉に見られる。
- (7) 記された地名のうち「丹比坂」の位置は明確でない。直木孝次郎氏は竹内街道が丹比道であるなら、それが羽曳野丘陵を越えるところの坂がそれであろうとしつつ、黒山から富田林喜志に抜ける羽曳野丘陵の坂である可能性も指摘する。[直木1996]。いずれの比定地でも石川麻呂追討軍が黒山からさらに飛鳥方面に進出してから戻ったという解釈となるだろう。
- (8) [直木孝次郎1996]。直木氏の説とは別に茅渟道を難波から茅渟へ通じる道とし、石川麻呂の逃走ルートを難波→和泉→河内→水越峠→飛鳥と考える遠藤慶太氏の説があるが[遠藤2014]、かなり遠方を通り、一日で到着できる距離とも考えにくい。
- (9) 洛陽の軸線の設定について煬帝が伊闕を基準としたことは『元和郡県図志』巻5・河南道一に「仁壽四年、煬帝詔楊素營東京。大業元年新都成、遂徙居、今洛陽宮是也。其宮北據邙山、南直伊闕之口、洛水貫都有河漢之象。東去故城一十八里。初煬帝嘗登邙山觀伊闕顧曰、此非龍門耶自古何因不建都于此。僕射蘇威對曰、自古非不知、以俟陛下。帝大悅遂議都焉。其宮室臺殿皆宇文愷所創也」にみえる。また成書年は不明ながら、『太平御覽』巻959・木部八・樛所引の『京洛記』に、「洛陽北山、謂之邙山。其上無大樹、大業都城之。北嶺上有古樛樹、不知其來、早晚婆娑、週圍四五畝、其樹在伊闕正南、時楊越公等將都城之日、據此樹以爲南北定准、嫌樛木名惡號曰婆娑羅樹」とあるのも伊闕を基準としていたことを示す史料と言える。なお「伊闕正南」は、文脈から「伊闕正北」の誤りであろう。
- (10) 藤原宮の先行条坊をめぐる議論のあるところだが、京域がまず設定され、そのグリッドに規制され、後に宮地が決められたとする林部均氏の説に従う[林部2001]。

参考文献

- 相原嘉之1999「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地－飛鳥の都市景観についての一視点－」『条里制・古代都市研究』第15号
- 足利健亮1985「河内の大道と条里」『日本古代地理研究』大明堂（初出1982「大阪平野南部の古道について」『人文』28号）
- 1991「難波京をめぐる古代要路網」上田正昭編『古代の日本と東アジア』小学館
- 石田幹之助1967『長安の春』平凡社東洋文庫
- 市 大樹2014a「難波長柄豊碕宮の造営過程」武田佐知子編『交錯する知－衣装・信仰・女性－』思文閣出版
- 市 大樹2014b「大化改新と改革の実像」『岩波講座 日本歴史 第2巻 古代2』岩波書店
- 市川 創2014「受け継がれた計画都市－難波京から中世へ－」脇田修『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』
- 井上和人2008「古代都城建設の実像－藤原京と平城京の史的意義を問う」『日本古代都城制の研究』吉川弘文館
- 今泉隆雄1993「平城京の朱雀大路」『日本古代宮都の研究』吉川弘文館
- 遠藤慶太2014「山田寺への道－蘇我倉山田石川麻呂と茅渟道・水分の道－」『史料 皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所報』
- 大阪文化財研究所2010『上本町遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 大阪文化財研究所2012『難波宮址の研究』第18

- 大阪市文化財協会2005「難波宮址・大坂城跡発掘調査(NW05-1)報告書」
- 大津 透1999「天皇の服と律令・礼の継受」『古代の天皇制』岩波書店
- 岡村勝行1999「まとめ」(財)大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告I』
- 愛宕 元2000「隋唐長安城の都市計画上での中軸線に関する一考察」『唐代史研究』第3号
- 阪田育功2009「南河内における古代の斜方位直線道路と周辺地割」『大阪府立狭山池博物館研究報告』6
- 佐藤武敏1971『長安』近藤出版社(のち、講談社学術文庫 2004年)
- 三宮昌弘2009「今回検出の『難波大道』について」大阪府文化財センター編『大和川今池遺跡I-難波大道の調査-』
- 朱 岩石2001「東魏北齊鄴城の内城の成立について」『史観』145冊
- 妹尾達彦2001『長安の都市計画』講談社選書メチエ
- 積山 洋2013a『古代の都城と東アジア 大極殿と難波京』清文堂
 2013b「初期難波京の造営」[積山2013a所収](初出「孝徳朝の難波宮と造都構想」塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版2004年に加筆)
- 高橋 工2007「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」(財)大阪市文化財協会『細工谷遺跡発掘調査報告II』
 2011「四天王寺東方の埋没地形と難波京条坊」大阪文化財研究所編『上本町遺跡発掘調査報告II 天王寺区寺田町1丁目(寺田町公園)における上本町遺跡発掘調査報告書』
 2012「古代の上本町遺跡」大阪文化財研究所『上本町遺跡発掘調査報告』IV
 2014「前期・後期難波宮跡の発掘成果」[中尾芳治・栄原永遠男編2014]所収
- 館野和己2000「大伴氏と朱雀門」『高岡市万葉歴史館紀要』第10号
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」脇田修『平成21~25年度(独)日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-』
- 直木孝次郎1996「茅渟道」『日本古代国家の成立』講談社学術文庫(初出1978「茅渟道について」『美原の歴史』第3号)
- 中尾芳治・栄原永遠男編2014『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 林部 均2001「条坊制導入期の古代宮都」『古代宮都形成過程の研究』(初出1999「藤原宮と『藤原京』-条坊制導入期の古代宮都の様相-」『古代学研究』147号)
 2004「藤原京の「朱雀大路」と京域-最近の藤原京南辺における発掘調査から」『条里制古代都市研究』20号
- 松尾信裕2014「古代難波の地形環境と難波津」[中尾芳治・栄原永遠男編2014]所収
- 村元健一2010「後漢雒陽城の南宮と北宮の役割について」『大阪歴史博物館研究紀要』第8号
 2014「中国宮城の変遷と難波宮」[中尾芳治・栄原永遠男編2014]所収
- 安村俊史2012「推古21年設置の大道」『古代学研究』196号

前期难波宫的南方空间

村元健一

认为孝德朝难波长柄丰碕宫的前期难波宫的调查进展,宫城内的状况大体明白了。另外,因为宫城构筑了在有起伏的上町台地上,宫城周围的情况还没有清楚的。关于难波京的存在、朱雀大街的存在都是课题。这些的问题是归结阐明宫城的南方空间的。探讨7世纪的日本、中国的都城的状态,考察这个问题。为结论的是,在7世纪没有做成朱雀大街的必然性,关于京的情况,开发地方集中宫城的南西方,即上町台地棱线上,一方,在东南地方,由于自然地貌的条件,不可能推进开发。因此,在难波宫南方的景观是在东西不均衡的。但是,台地上的区划无视自然的地貌,意识到正式方位,预感新王都诞生的。